

公共藝術美術館城市 FARET立川

在「FARET立川」，不論是誰都能在街頭漫步中，隨時自由鑑賞20世紀末全球頂尖藝術家的現代藝術作品，而且完全免費。

這109件現代藝術作品在此期待著與您不期而遇，您不但可以大飽眼福，還可以觸摸或在作品上小坐片刻，甚至傾聽作品的聲音—任由作品刺激您的所有感官。

歷史

1994年10月13日，「FARET立川」誕生於JR立川站北口的美軍基地遺址上，佔地5.9公頃，共有飯店、百貨公司、電影院、圖書館及辦公大樓等11棟建築物。「FARET」這個名字是將義大利文的「FARE(意思是創造、新生)」加上立川(Tachikawa)的第一個字母「T」，希望這裡對在此工作的人或造訪此地的遊客而言都能成為「創造場域」，不斷發展並迎向未來。藝術總監北川富朗(Furumu Kitagawa)先生精心策畫，將街區看成森林，並根據3大理念設置藝術作品，使一件件公共藝術作品就像棲息在此的生命(精靈)一般。

基礎理念

1_ 折射世界的城市

來自36個國家的92位藝術家以不同的構思、手法及材料創作出公共藝術作品，這些藝術作品設置在城市中，讓這裡有如鏡子一般折射出20世紀末的多元化世界精神。其中包括眾多名留美術史的著名藝術家如唐納德 賈德(Donald Judd)、馬丁 基彭伯格(Martin Kippenberger)等人的作品。



69 馬丁 基彭伯格

2_ 化功能(Function)為藝術(Fiction)!

藝術家的巧手使車輪擋塊、長椅、標識、街燈、戶外水龍頭及通風口等城市功能設施幻化為美好、令人驚艷且不可思議的公共藝術作品。這些藝術作品完全融入城市，近在咫尺，也正因為如此為人們所喜愛，與人們緊密相關，呈現出豐富多樣的風貌。



7 伊藤 誠

3_ 充滿驚喜和發現的城市

作品刻意不設置說明看板，請您一邊探索街區，一邊憑藉自己的感性直接接觸作品。您可能在路邊、行道樹的林蔭間、大樓牆面等意想不到的場所不經意地邂逅超乎想像的藝術作品。有些藝術作品白天、夜晚會呈現出不同風貌，城市獨有的夜景也魅力十足。



52 菲利浦 瓦里尼

交通指南

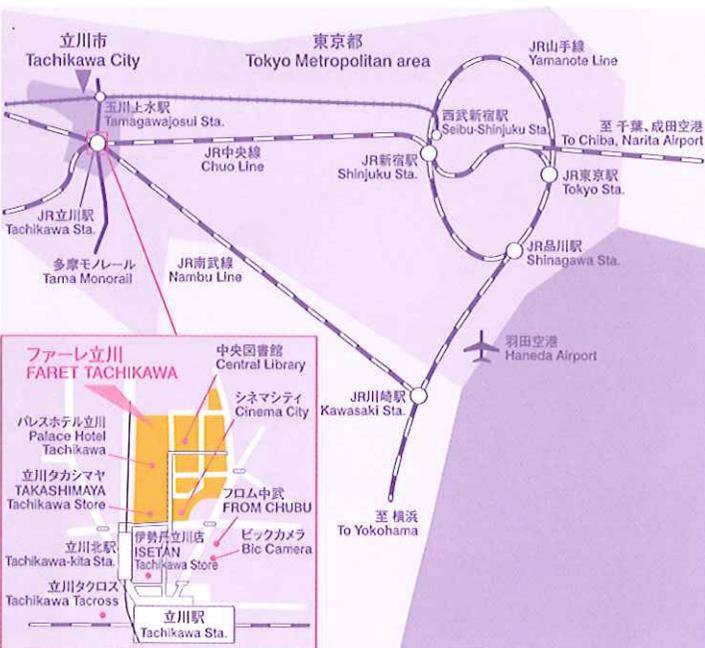
JR立川站北口、多摩單軌電車立川北站途經行人天橋可直達。從立川站步行3分鐘，從立川北站步行2分鐘即可到達。

*至立川站北口的交通指南

〈電車〉從東京站搭乘中央線，約需45分鐘。

〈自駕〉從東京出發，上中央高速公路，在「國立府中IC」下交流道，駛入甲州街道・20號國道。在「日野橋十字路口」轉入立川大道，前往立川站北口。

〈利木津巴士(直達立川)〉距成田機場車程約3小時。距羽田機場車程約1個半小時。



資訊查詢

網站主頁 <http://www.tachikawa-chiikibunka.or.jp/faretart/>

臉書(Facebook) <https://www.facebook.com/faretart>

推特(Twitter) @faretart <https://www.twitter.com/faretart>

〈公共藝術作品地圖〉

在婦女綜合中心AIMU一樓(FARET立川街區內)等處免費分發。

〈藝術作品導覽App「FARET立川ART導航」〉

支援多種語言(日文、英文、中文(簡體繁體)、韓文)，可離線使用
可自Google Play或AppStore免費下載

〈FARET俱樂部ART導覽行程〉

人數1名起即可報名參加

志工組織「FARET俱樂部」 電子郵件 faretclub@gmail.com

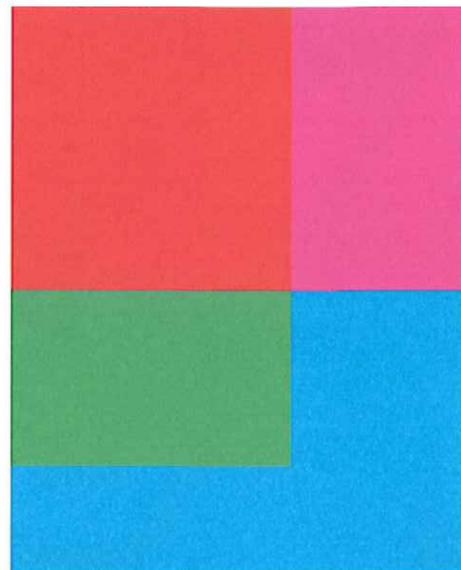
洽詢處

FARET立川 ART管理委員會事務局(立川市地域文化課內)

電話:042-523-2111 分機4501 傳真:042-525-6581

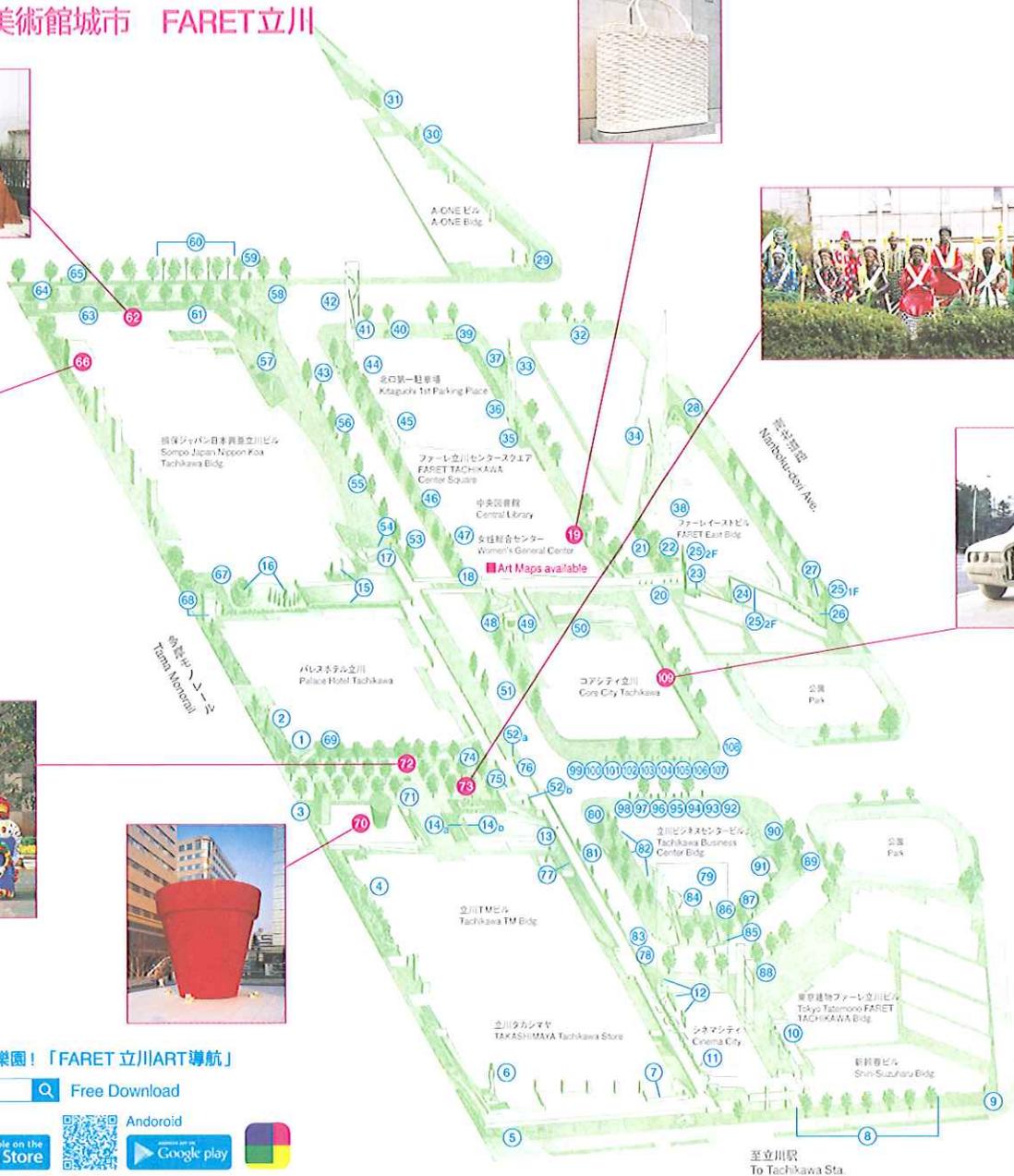
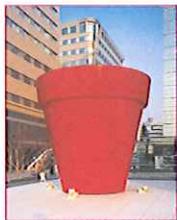
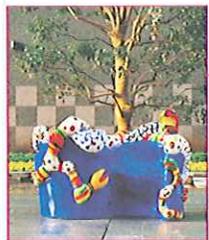
FARET立川ART導覽

中文(繁體字) / 中國語(繁體字)



ファレ タチカワ

公共藝術美術館城市 FARET立川



帶領您巡遊藝術樂園！「FARET立川ART導航」

FARET NAVI Free Download

Available on the App Store

Available on Google play

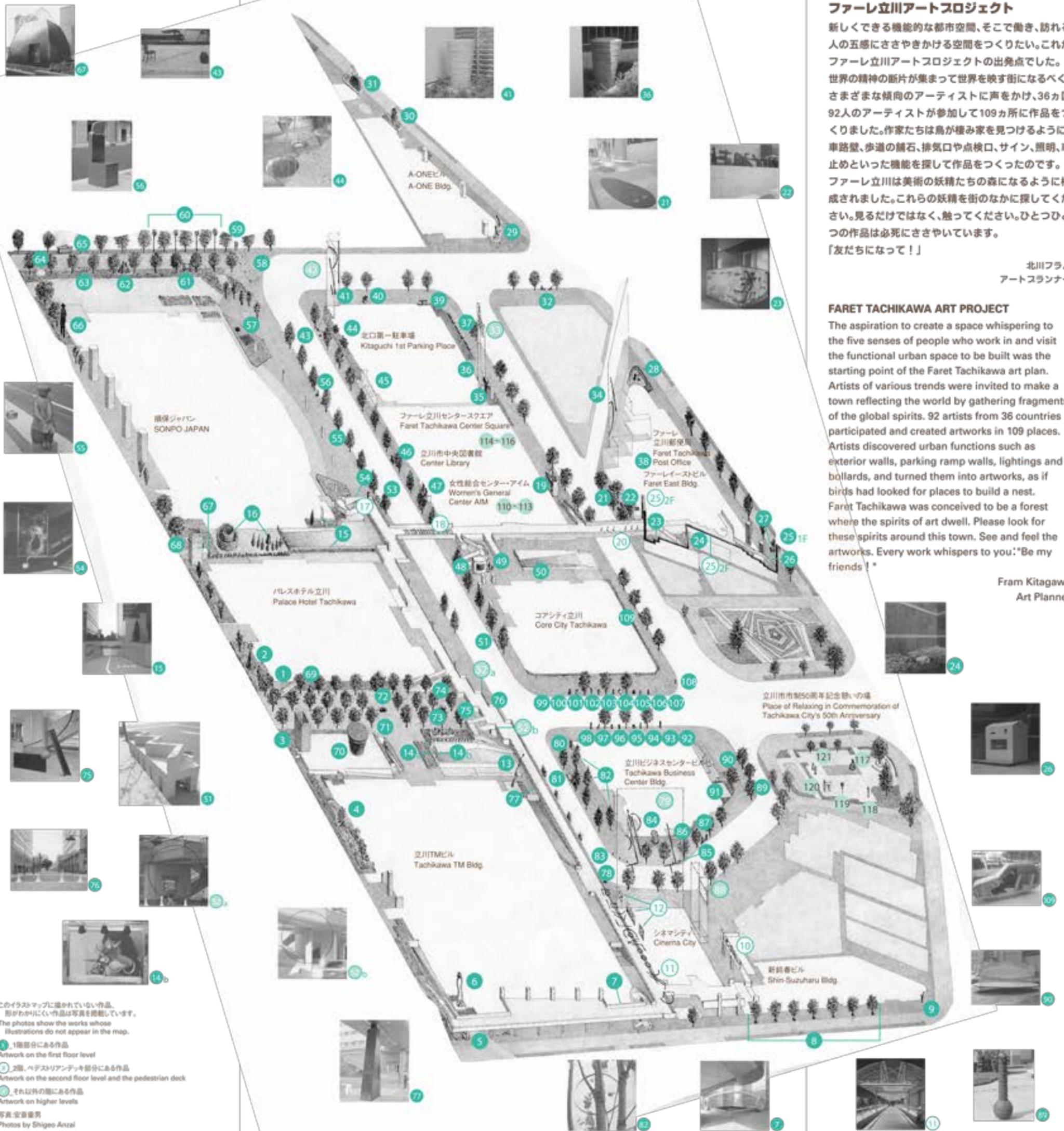
- ① - / 理查德 威爾遜
- ② 訪問者 / 新宮 晉
- ③ 水缸 / 查爾斯 沃森
- ④ - / 岡崎 乾二郎
- ⑤ - / 伊藤 誠
- ⑥ 17歲 / 袴田 京太郎
- ⑦ - / 伊藤 誠
- ⑧ 來自蜻蜓飛機的訊息 / 長澤 伸哉

- ⑨ 立川的女人們 / 艾斯特魯 阿爾巴爾達內
- ⑩ 自然不會微笑, 人會微笑 / 馬納舍 卡迪希曼
- ⑪ Ena-1 / 史蒂芬 納科斯
- ⑫ 細胞類型, 細胞器, 有機體 / 湯尼 克拉克
- ⑬ 風吹的地方 / 田中 信太郎
- ⑭ - / 白井 美穗
- ⑮ - / 白川 昌生
- ⑯ 時鐘庭院 / Montien Boonma

- ⑰ 立川的女人們 / 艾斯特魯 阿爾巴爾達內
- ⑱ 條碼橋 / 坂口 寬敏
- ⑲ 最後的購物 / 唐 大霧
- ⑳ 古典交信機, 傳聲管 / 牛島 達治
- ㉑ - / 大岩 奧斯卡
- ㉒ - / 納迪姆 卡拉姆
- ㉓ - / 托尼 Berlant
- ㉔ 響尾蛇星與七個方位 / 吉米 達勒姆

- ㉕ - / 柳 健司
- ㉖ 水標 / PH Studio
- ㉗ - / 格奧爾基 Tchapanov
- ㉘ 口紅 / 克萊斯 歐登柏格
- ㉙ 立川的女人們 / 艾斯特魯 阿爾巴爾達內
- ㉚ 人間扶手椅 / 帕特里克 VILAIRE
- ㉛ Stack in Frame / 國安 孝昌
- ㉜ 對話的繫纜柱 / 關根 伸夫
- ㉝ - / 江上 計太
- ㉞ Tria-3 / 史蒂芬 納科斯
- ㉟ 臉-車 / Stasys Eidrigėvičius
- ㊱ 水缸 / 查爾斯 沃森
- ㊲ - / 唐納德 賈德
- ㊳ 屋頂上的圓 / 菲里斯 瓦里尼
- ㊴ 收穫馬鈴薯的人 / 巴勃羅 雷諾索
- ㊵ 半人馬摩托車 / 篠原 有司男
- ㊶ 水缸 / 查爾斯 沃森
- ㊷ Tessera-4 / 史蒂芬 納科斯
- ㊸ 你只要坐在這裡。我將會好好的看守著妳 / 侯賽因 Valamanesh
- ㊹ 禪宗花園的能量指標 / 麗貝卡 霍恩
- ㊺ 黑龍-家族用 / 瑪瑞娜 阿布拉莫維奇
- ㊻ - / 格奧爾基 Tchapanov
- ㊼ 紅色作品 "像似殺死母子的父親"、藍色作品 "像似讓被父親殺死的孩子受精的父親" (不太明白真正的意思) / 彦坂 尚嘉
- ㊽ 靶標的背面 / 牛 波
- ㊾ 倒下的人 / 奧斯曼 索烏
- ㊿ 咒文 獻給 NOEMA (原文取於石牟禮道子「積海之記」、James Joyce的「年輕藝術家的肖像」) / 約瑟夫 科蘇斯
- 1 - / 依田 久仁夫
- 2 背對背的圓 / 菲里斯 瓦里尼
- 3 - / 依田 久仁夫 + 艾斯特魯 阿爾巴爾達內
- 4 - / 白井 美穗
- 5 - / 山本 正道
- 6 - / 深井 隆
- 7 星座或是星星的歸宿 / 片瀨 和夫
- 8 人間球體空間入口 / 箕原 真
- 9 立川的女人們 / 艾斯特魯 阿爾巴爾達內
- 10 - / "IFP"
- 11 雙人座長椅 / Aleš Vešely
- 12 山 / 阿尼什 卡普爾
- 13 長耳朵的椅子 / 藤本 由紀夫
- 14 - / Ulrich Rückriem
- 15 - / 川俣 正
- 16 提著公事包的男人 / 喬納森 博羅夫斯基
- 17 - / 青木 野枝

- 18 Luna / 宮島 達男
- 19 - / 馬丁 基彭伯格
- 20 - / 讓 皮埃爾 雷諾
- 21 模擬自行車 / 羅伯特 勞森伯格
- 22 會話 / 妮基 德 桑法勒
- 23 - / 桑德傑克 阿克潘
- 24 Tachikawa Box / 山口 啓介
- 25 漂浮的形狀-赤 / 垂 / 植松 奎二
- 26 人間球體空間入口 / 箕原 真
- 27 "94 · 82" / 市橋 太郎
- 28 - / 格奧爾基 Tchapanov
- 29 Thio-2 / 史蒂芬 納科斯
- 30 偶像 / 何塞 戴 吉馬良斯
- 31 黃色的種類 / 岡本 敦生
- 32 關係-未來 · 2116年、關係-未來 · 2132年、關係-未來 · 2155年 / 河口 龍夫
- 33 - / 塔德烏什 Myslowski
- 34 - / 江上 計太
- 35 遶過的大木 / 西雅秋
- 36 - / 弗朗西斯科 方特
- 37 打開 / 沈 文燮
- 38 - / 費利克斯 岡薩雷斯-托雷斯
- 39 - / 喬瑪 帕蘭薩
- 40 - / 馬丁 普耶爾
- 41 水缸 / 查爾斯 沃森
- 42 Bema / Gonzalo 豐盛卡
- 43 - / 亨利 Munyaradzi
- 44 - / 竹田 康宏
- 45 - / 托馬索 Cascella
- 46 黑柱 / 湯村 光
- 47 - / 潮田 友子
- 48 - / 氏家 慶二
- 49 都市之神 / 羅伯特 G. 維拉紐瓦
- 50 - / 陰里 壽朗
- 51 浮游之水 / 松田 重仁
- 52 - / 植村 公雄
- 53 從地中到世界 / 利卡 目塔爾
- 54 - / 小林 泰彥
- 55 免與龜 / 藤原 吉志子
- 56 - / 金澤 健一
- 57 - / 黑鳥 晴男
- 58 - / 瑞貝卡 貝爾莫爾
- 59 - / 維托 阿肯錫



ファール立川アートプロジェクト

新しくできる機能的な都市空間、そこで働き、訪れる人の五感にささやきかける空間をつくりたい。これがファール立川アートプロジェクトの出発点でした。世界の精神の断片が集まって世界を映す街になるべく、さまざまな傾向のアーティストに声をかけ、36カ国92人のアーティストが参加して109カ所に作品をつくりました。作家たちは鳥が寝み家を見つけるように、車路壁、歩道の舗石、排気口や点検口、サイン、照明、車止めといった機能を探して作品をつくったのです。ファール立川は美術の妖精たちの森になるように構成されました。これらの妖精を街のなかに探してください。見るだけではなく、触ってください。ひとつひとつの作品は必死にささやいています。「友だちになって！」

北川フラム
アートスランナー

FARET TACHIKAWA ART PROJECT

The aspiration to create a space whispering to the five senses of people who work in and visit the functional urban space to be built was the starting point of the Faret Tachikawa art plan. Artists of various trends were invited to make a town reflecting the world by gathering fragments of the global spirits. 92 artists from 36 countries participated and created artworks in 109 places. Artists discovered urban functions such as exterior walls, parking ramp walls, lightings and bollards, and turned them into artworks, as if birds had looked for places to build a nest. Faret Tachikawa was conceived to be a forest where the spirits of art dwell. Please look for these spirits around this town. See and feel the artworks. Every work whispers to you: "Be my friends!"

Fram Kitagawa
Art Planner

このイラストマップに掲載されていない作品、
 形がわかりにくい作品は写真を掲載しています。
 The photos show the works whose
 illustrations do not appear in the map.

- ① 1階部分にある作品
Artwork on the first floor level
 - ② 2階、ペデストリアンデッキ部分にある作品
Artwork on the second floor level and the pedestrian deck
 - ③ それ以外の階にある作品
Artwork on higher levels
- 写真: 安齋重男
 Photos by Shigeo Anzai

ファール立川の作品 1-109
Artworks in Faret Tachikawa 1-109

1 リチャード・ウィルソン イギリス 1953-
Richard Wilson UK 1953-

6200×5440×1500mm aluminum, stainless steel
共同出入口、換気口 entrance to the utility tunnel, vent
この階段の作品の下は地下の巨大な機械室に降りて行く本道の階段があります。なおかつこれはその地下の機械室の換気口にもなっています。階段はそのなかに隠された姿を呈しているのです。彫刻は典型的な英式階段に似せてアルミニウムと鋼でつくられています。ウィルソンは奇想天外な方法によって現実の空間を歪ませる作家です。

2 新宮晋 日本 1937-
Susumu Shingu Japan 1937-

訪問者 Visitor
6770×4380×3400mm stainless steel, aluminum, corten steel
換気口 vent
新宮晋は動く彫刻をつくる作家です。地球の呼吸ともいえる風や、血液ともいえる水という、自然のなかで形になりにくいものを、金属の工芸物によって捉えようとしてきました。それは手品のような重宝の世界です。風や水という透明なものの存在を知らせるためにこれらの仕上げは微妙で精巧なものでなくてはなりません。そこに作家の力量があるのです。

3 チャールズ・ウォーゼン アメリカ 1958-
Charles Worthen USA 1958-

水栓 Water Quiver
730×465×270mm bronze
取水栓カバー water faucet cover
ウォーゼンはチューブを使った有機的な形をよく使います。今回つくった4つの取水栓のためのカバーはすべて輪郭のなかにあります。輪郭は街が存在する以前にあった自然の跡を思い起こさせます。音、人びとは水を井戸から汲み上げ、家で高く運びました。その器のような水栓の取水栓のカバーをつくらせて考えたのです。この器は、水を考える際に重要な、象徴的な意味をもっています。

4 岡崎乾二郎 日本 1955-
Kenjiro Okazaki Japan 1955-

4000×2500×4000mm steel
換気口 vent
この作品がつけられていた頃、それは造船所に横たわる船の骨格のようであり、シロナガス鯨のあばら骨のようでした。6面の換気口をおおって構造を、岡崎はコンピューターを使って美術作品に仕上げたのです。線にはいろいろな表情がありますが、この線には日本と西洋の文化的な落差をこえた普遍的な美術言語で語ろうと努力している日本作家の自己表現が見えるのです。

5 伊藤誠 日本 1955-
Makoto Ito Japan 1955-

3800×4800×4000mm steel
換気口 vent
伊藤誠がつくる作品はある面から見ると平面的ですが他の側から見るとまったく違って見えるという空間です。今回のアパートの脇にあるペDESTリアンデッキ下のドライエリアは普通は自転車置き場などになる場ですが、作家はこの空間を遊び場に変えてしまいました。建築上のデッドスペースは動物たちや子どもと同じようにアーティストにとってもライブスポットなのです。

6 袴田京太郎 日本 1963-
Kyotaro Hakamata Japan 1963-

17才 Seventeen
9000×1200×1200mm iron
換気口 vent
袴田京太郎の特色は開口部の不思議な造形です。それはいわば植物の食虫花のもつ一種あふぬげな魅力です。また同時に鉄を使いながら鉄を意図させない面白さがあります。彼の作品にはものをつくりはじめる前の一種の「何にしようかな」というハラハラドキドキするような心とときめきを感じられるのです。

7 伊藤誠 日本 1955-
Makoto Ito Japan 1955-

3000×9000×3000mm steel
換気口 vent
No.5を参照してください。

8 長瀬伸徳 日本 1960-
Nobuo Nagasawa Japan 1960-

トンボヒコーキのメッセージ
Dragonfly+Airplane+Dragonplane
12304mm (7 pieces total) cast iron
ツリーサークル tree grates
長瀬伸徳は大地のなかで土を建物のようにも作りあげた作品を以前つくりました。それ以来、つくられる場所のもっている特性や時間的なものにこだわってきているようです。この地域に幼い頃住んでいた記憶としてのトンボと日本で最初の飛行機があり、軍部の基地でもあった立川の歴史を組み合わせて、飛行機とトンボが変化していく形をつくったのです。

9 エステル・アルバルダネ スペイン 1947-2004
Esther Albardeane Spain 1947-2004

タチカワの女たち Tachikawa Women
2000×450×400mm steel
道徳神(見知らぬ人) guardian deity figure (stranger)
エステルは窓の外を覗きながら見ている、何かを持っている女性をよく描きます。その女性たちが隣に集まっているのは魚や月形のもので、それが何なのか聞いても教えてもらえません。女性たちがいつも持っているだけの女性である彼女には残念なのです。彫刻の形はシンプルですが、確かなデザインに支えられた姿は美しい。犬は作家の大好きな動物です。

10 メナシェ・カディシマン イスラエル 1932-
Menashe Kadishman Israel 1932-

自然は微笑まず、人は微笑む
Nature does not smile, people do
2528×1800×120mm steel, lighting equipment
ペDESTリアンデッキ側壁 pedestrian deck wall
彼は主として鉄板を使った立体をつくりますが、それ以外の仕事のなかにも手がよく出てきます。それは人間の彫刻とともに歩んできた彼の歴史です。彼はユダヤ人、アラブとイスラエルの戦争の悲劇をテーマにしていることも多いのですが、そこには自分の出身や民族の範囲をこえた人間の悲しさが出ています。彼の仕事からは鉄がやわらかな素材だということが伝わってきます。

11 スティーヴン・アントナコス ギリシャ/アメリカ 1926-
Stephen Antonakos Greece/USA 1926-

Ena-1
100mm×100mm×140mm stainless steel, neon tubes
パサージューフ・ライティング canopy light
アントナコスはネオンという輝と色をもつ素材を使って都市のなかに朝、昼、夕、夜と違った表情をつくりました。2オの時にギリシャからアメリカに渡った彼のネオンの作品からはどこかカタコンベ(地下墓地)にひかりを放つようなつかみどころもやわらかな表情が伝わってきます。彼のネオンは都会の夜に映くやさいい花となりました。

12 トニー・クラッグ イギリス 1949-
Tony Cragg UK 1949-

セルタイプス、オーガネル、オーガニスム
Cell Types, Organelle(Cell groups), Organism
3800×2400mm, 3600×4900mm, 3800×2400mm fiberglass reinforced plastic, stainless steel
壁面レリーフ wall relief
クラッグは日常使われているものを、組みかえることでまったく新しいものをつくりあげた仕事をしました。これはいつも微妙に彫られていて、それは3つの金属がさかやかにふるえる声のように感じられるのです。作家の作品はいつも詩のような、あるいは言葉の発露、発生の瞬間のような瞬間を捉えようとするまなざしによってできています。「風の吹く場所」です。

13 田中信太郎 日本 1940-
Shintaro Tanaka Japan 1940-

風の吹く場所
A Place Where the Wind Blows
8800×8000×4000mm bronze, stainless steel, corten steel
換気口 vent
田中信太郎はドライエリアの上に鉄とステンレスの線によって飛翔する3つのブロンズ製の球体を浮かせました。これはいつも微妙に彫られていて、それは3つの金属がさかやかにふるえる声のように感じられるのです。作家の作品はいつも詩のような、あるいは言葉の発露、発生の瞬間のような瞬間を捉えようとするまなざしによってできています。「風の吹く場所」です。

14 白井英穂 日本 1992-
Mio Shirai Japan 1992-

(a)13000×2600×183mm, (b)1700×2600×183mm stainless steel, processed graphic film sheet
車路壁看板 billboard on the parking ramp wall
「階段を降りてくる花嫁」とピカソの絵の前でこちらを「発売する女性」。さらに「ハーベルを持って坂道を登る女性」。これらが2カ所の3枚の看板の内容です。ここに彼女は受け身である現在の女性とそれとあらがうとする自分自身を映しています。白井英穂は小さなミニチュアをつくり、写真に描って看板にするという方法を使います。

15 白川昌生 日本 1948-
Yoshio Shirakawa Japan 1948-

(a)1800×4800×10mm, (b)1400×1660×10mm galvanized steel
車路 parking ramp
白川昌生は地下に入る車路を使って仕事をすることになりました。そこで彼は、車路全体の平面図にある形を車路の壁に金属の切り抜きでつくりました。車路の壁にある種々な形に立ってという作品をつくりました。建築上ですべてにさしこまれた形をネガとポジでつくるといえる知的なゲームであり、見る人に発見の喜びを与えます。

16 モンティエン・スズマー タイ 1953-2000
Montien Boonma Thailand 1953-2000

石鐘の庭
Rock Bell Garden
(a)H2560×5800mm, (b)H3584×3200mm, (c)H2000×1500mm
brass, granite, steel
庭園の庭 garden sculpture
タイの作家であるスズマーは独自の文化をもった民族と、その文化の根となる仏教や伝統的な儀礼が西洋的な空間と出会う場面の緊張感を作品にしています。彼はおのれの文化と西洋の文化との間で格闘しています。立川の仕事を始める時、彼の妻さんは死の床にありました。この作品が折りの空間に思えます。

17 エステル・アルバルダネ スペイン 1947-2004
Esther Albardeane Spain 1947-2004

タチカワの女たち
Tachikawa Women
2120×330×440mm steel
道徳神(見知らぬ人) guardian deity figure (stranger)
No.9を参照してください。

18 坂口寛敏 日本 1949-
Hirotoshi Sakaguchi Japan 1949-

バーコード・ブリッジ
Barcode Bridge
3400×20000mm ceramic tile
ペDESTリアンデッキ歩道 pedestrian deck
ペDESTリアンデッキのブリッジの上に貼ったタイルがバーコードになっていますが、これはもともとの建築予定だけができた作品です。資本主義社会を端的にあらわすバーコード・ブリッジが一番面白いという論理に作家の遊びがあるのです。坂口は平面的な作品を主につくる人ですが、最近近法をあげたり、道路に映る自分の影の変化を一日中描き続けたりする作家でもあるのです。

19 タン・ダ・ウ シンガポール 1943-
Tang Da Wu Singapore 1943-

最後の買い物
Last Shopping
3700×3450×1050mm fiberglass reinforced plastic, stainless steel
換気口 vent
タン・ダ・ウは社会の矛盾やそこへこむ暴力性などを、日常品を使って表現してきた作家です。立川の換気口ではいろいろなことを考えました。スカートやまくらあげられたマリリン・モンロー像、壁にぶら下がったフライパン、醤油やオリーブや若菜などの7つの皿、竹の葉で包まれるされたダンゴなどです。周でつくる案が、期限によってファイバーグラスになりました。

20 牛島達治 日本 1958-
Tatsuji Ushijima Japan 1958-

古典的な発信機器、伝声管
Classical Communicating Instrument, Speaking Tube
H1800×508mm (8 pieces total) stainless steel
オブジェ object
牛島達治は音の機械をつくることに喜びを見いだしている作家です。まだ回り続け土を耕している機械、石をひくだけの機械など。しかしそこにはいつも精神のふるえがあるのです。ものふるえの新しい技術は目的に同様にたまたま合理的な解決をもとめるのですが、そこに行かないことにより彼の作品は心のふるえをもつ結核のたといえます。「風の音は何色？」と伝声管はさかっています。

21 大岩オスカル ブラジル/日本 1965-
Oscar Satio Oiwa Brazil/Japan 1965-

40×900×2500mm (10 pieces total) cast iron, bronze
舗装材 paving material
オスカルは日系2世のブラジル人で、建築家として日本に来ましたが、今は美術の仕事をしています。ですから彼の背景には都市が画面のようなものとして横たわっているようです。都市にユーモアのある風穴を開けようとする作品をつくるのが特徴です。ここでは太古の昔、立川にいたたかもしれない三葉虫やソウリムシのような大きな魚を舗装に浮かび上がらせた。

22 ナディム・カラム レバノン 1957-
Nadim Karam Lebanon 1957-

2470×5545×1695mm steel
機械屋人口 entrance loading entrance
ソウ、キリン、山猫などのシルエットは古代の行列です。それは古代と現代が一緒になったメルヘンで、絵画のような世界です。彼は日本で建築の勉強をしつつ作家活動をした上で、お水取りなど日本の空間に興味をもっています。アラブと日本には東洋的なつながりがあり、それがあつたかきさきと呼び起こすようです。

23 トニー・バーラント アメリカ 1941-
Tony Berlant USA 1941-

1443×2190×2100mm metal
換気口、船道口 vent, oil tap
バーラントはこの場所ですることを喜びました。少し暗く、給油口もあるドライエリアの壁は、普通そんなには見られませんが、彼はここを遊園地のなかに遊園地のように感じました。ここで作家は金属の板片を貼り合わせて彼の内的な世界を描いています。彼はアメリカ先住民の美しい植物の葉と研究を行っています。彼はアメリカ先住民の美しい植物の葉と研究を行っています。彼はアメリカ先住民の美しい植物の葉と研究を行っています。

24 ジミー・ダーハム アメリカ 1940-
Jimmie Durham USA 1940-

ガラガラヘビ星と7つの方位
The Rattlesnake Star and the Seven Directions
20m rope stainless steel, stone
植栽内オブジェ object in shrubbery
ダーハムはアメリカの先住民チェロキーの出身です。立川に来た時、彼は基地跡の空気が残っているこの場所を想像して歩きまわりました。青年の頃、兵役で日本に滞在したそうです。チェロキーには東、南、北、上、下、内面、という7つの方位があるそうです。彼は民族の記憶をこの都市のなかにひとつの出会いとして設置したのです。

25 朝倉司 日本 1961-
Kenji Yanagi Japan 1961-

370mm×370mm×120m stainless steel, neon tubes
基本 gate
このゲート(基本)は一番早い時期に建築物として建てられました。古い建物と新しい建物の間にある暗く狭い通路のスペースは建築的処理ではなかなか難しく、ここはアーティストの出番です。ふたつの赤い門とそれをつなぐ赤い鉄、夕方に降る雨や光る紫色のネオンの壁は魅力的な空間をつくりだしました。

26 PHスタジオ 日本 1984結成
PH Studio Japan 1984-

ウォーターマーク(水標)
Watermark
2070×2055×1100mm stone, acrylic sheet, lighting equipment
消防栓水栓カバー fire hose box
PHスタジオは建築の魅力を美術という広い抽象的世界にとりこみ、また美術というパーソナルな声の部分を建築の世界にとりこもうとしているグループです。「社会に機能しているものが美術になりえるか?」という問いをテーマにしています。以前彼らは捨ててある椅子を解体し、つなぎあわせ色を塗って、もとの椅子よりずっと美しい椅子をつくったこともあるのです。

27 ゲオルギー・チャスカノフ ブルガリア 1934-
Georgi Tchapanov Bulgaria 1934-

1560×300×1050mm steel
道徳神(見知らぬ人) guardian deity figure (animal in Tachikawa-horse)
彼はいつもドレスを着ています。そのドローイングはスピードがあつていきいきしています。肖像彫刻も得意ですが、今回は立川の鉄骨屋敷をまわって、古く使われた農機具の残骸を集めてきました。耕田機の羽根は羊の角だと、材料を見ながらどういった動物をつくるか考えていくのでした。しかし機械はとがっていたりするので、街の中に置くために安全にするのが一工夫でした。

28 クレス・オルデンバーグ スウェーデン/アメリカ 1929-
Claes Oldenburg Sweden/USA 1929-

リップスティック
Lipstick with Siroko Attached(to M.M.)
2070×3900×3100mm metal
オブジェ object
金属板に色を塗っただけのリップスティック(口紅)。それは20世紀の都市文明の象徴のようなものです。オルデンバーグはよく知られた日用品をキャンパスや都市のなかに突然もちこみ、そのものとその背景を新鮮に見せてきた作家です。それにしてもこのリップスティックはその鮮やかな赤い色をもって永遠の若々しさとみずみずしさを自己主張しているように見えるのです。

29 エステル・アルバルダネ スペイン 1947-2004
Esther Albardeane Spain 1947-2004

タチカワの女たち
Tachikawa Women
(a)2490×1400×250mm, (b)2450×570×430mm steel
道徳神(見知らぬ人) guardian deity figure (strangers)
No.9を参照してください。

30 パトリック・ヴィレール ハイチ 1941-
Patrick Vilaire Haiti 1941-

人間形椅子
Human Armchair
2445×900×900mm iron
植栽内オブジェ object in shrubbery
この人間形椅子は、権力のシンボルだという考えから生まれています。いわば人間が人間に屈服するための王座なのです。彼は鉄を使って彫り上げた椅子が神話や民間伝説のなかにある奥深い意味をあらわすことができるかと考えています。この椅子を見ていると椅子が椅子であるだけでなく、権力者であり、また神話的世界の王者であるかのように見えます。

31 國安孝昌 日本 1957-
Takamasu Kuniyasu Japan 1957-

ゴミ集積所ゲート
waste disposal site
2660×3000×720mm brick, aluminum, steel
ゴミ集積所ゲート waste disposal site
國安孝昌は、レンガと木をつかった構造物をつくります。それはあたかも、古い城壁の構造があらわになつたふうに見えるのです。土と木という素朴な材質がもつ単純さと現代風の構造的な魅力になっているのですが、今回はゴミ集積所に永久に設置されるものなので、鉄とブロンズの木とレンガでゲートをつくったのです。「自立したこと、主張しないこと、普通であること」がテーマです。

32 関根伸夫 日本 1942-
Nobuo Sekine Japan 1942-

対話のボールド
Dialogue Bolards
900×1000×300mm (2 pieces total) granite
車止め bolards
関根伸夫はアートを環境のなかに活かそうと仕事をしてきたパオニアです。アートがギャラリーや美術館のなかに納まるものではなく、都市の空間のなかに息づくことへの興味をよこし、ローンを歩いて来たといえます。日本でも奈良、平安、鎌倉時代には彫刻が、桃山時代には障壁画が建築と結びついて盛んになりました。彼は美術の現代における可能性を探ろうとしているのです。

33 江上計次 日本 1951-
Keita Egami Japan 1951-
13000×6500mm stainless wire
サイン sign
江上計次は仕切られた形(グリッド)の組み合わせによる仕事をします。ここではふたつの作品、換気塔の天蓋と、ビルのつべんのワイヤーによるクモの巣をつくりました。金属の線の裏に見える青空は、時に無限に広がる青空よりも一層青い色を強調させることができます。彼の作品は仕切ることによってより想像力をはたかせる日本古来の哲学に似ているともいえるようです。

34 スティーヴン・アントナコス ギリシャ/アメリカ 1926-
Stephen Antonakos Greece/USA 1926-
Tria-3
150mm×150mm×43m stainless steel, neon tubes
壁面照明サイン illuminated sign
No.11を参照してください。

35 スタシス・エイドリグヴィチウス リトアニア/ポーランド 1949-
Stasys Eidrigevičius Lithuania/Poland 1949-
顔一車
Face-Car
2500×1700×838mm corten steel, stainless steel
植栽内サイン sign in shrubbery
スタシスは絵本作家として有名ですが、芝居の演出など多方面で活躍をしています。彼の仕事には仮面が出てきます。仮面は神々との交流から生まれたものですが、人を驚かすと同時に人が新しい世界に入っていく時に必要な(勇氣の代わりになる)ものでした。スタシスはリトアニアの出身で今はポーランドに住んでいますが、人生の経緯が作品と深く結びついているようです。

36 チャールス・ウォーゼン アメリカ 1958-
Charles Worthen USA 1958-
水壺
Water Quiver
730×465×270mm bronze
取水栓カバー water faucet cover
No.3を参照してください。

37 ドナルド・ジャッド アメリカ 1928-1994
Donald Judd USA 1928-1994
500×1000×500mm (7 pieces total) corten steel, iron
壁彫刻 wall sculpture
ジャッドは物質のもつ本質を極限までつきつめようとした作家です。シンプルながらも美しい。ジャッドは立川の仕事を前座で用意しはじめ、1994年2月12日に亡くなりました。建築の条件が変化するために、ジャッドが当初設置を考えていた壁がなく、そのため新たな壁を用意しなくてはならなくなりました。これはジャッドの運命となります。

38 フェリーチェ・ヴァリーニ スイス/フランス 1952-
Felice Varini Switzerland/France 1952-
屋上の円
Top Circle
acrylic paint
ペントハウスサイン penthouse sign
ヴァリーニは被覆した空間を選んでそこに色を塗るのです。ギザギザであったり直線であったり、切れていたりする。しかし、それらの太さが違う切れた線は、ある1点から見るひとつの真円になっている。その真円をつくり、円に見えなくとも1点だけでは見ることが空間の構造の不思議さを教えてくれるのです。この円は都市にある秘密の暗号ともいえるようです。

39 パブロ・レイノソ アルゼンチン/フランス 1955-
Pablo Reinoso Argentina/France 1955-
ジャガイモを収穫する人
The Potato Harvester
1200×2350×300mm bronze
植栽内オブジェ object in shrubbery
レイノソの作品は芽生えばかりの植物のようです。右側のスプーンの部分にジャガイモをのせ、こぼれたジャガイモが足もとに広がるという考えは、人間の生活があつてこそ美術もあるのだと気付かせてくれます。「自分が彫刻したこの彫(さじ)に、私はまた同時に、私の子どもに初めて食物を与えたこと、死の床にある父に最後の食べ物を与えたことへの、素朴な真摯を見るのです。」

40 篠原有司男 日本 1932-
Ushio Shinohara Japan 1932-
ケンタウルス・モーターサイクル
Centaur Motorcycle
1550×1200×780mm bronze
植栽内サイン sign in shrubbery
これはカエルが乗ったオートバイのお化け、オートバイの神様です。篠原有司男は気合で生き、気合で仕事をしてきた作家で、その目撃作品にもあふれています。車輪やチェーンやスプーンの形が見えるとはいえず、全体にあるのは作家の手が握った粘度のぐにぐにとしたかたまりの連続なのです。握った形ができていく時の体験、それは彫刻の発点かも知れません。

41 チャールス・ウォーゼン アメリカ 1958-
Charles Worthen USA 1958-
水壺
Water Quiver
730×465×270mm bronze
取水栓カバー water faucet cover
No.3を参照してください。

42 スティーヴン・アントナコス ギリシャ/アメリカ 1926-
Stephen Antonakos Greece/USA 1926-
Tessera-4
100mm×100mm×45m stainless steel, neon tubes
壁面照明サイン illuminated sign
No.11を参照してください。

43 ホセイン・ヴァラマネシュ イラン/オーストラリア 1949-
Hossein Valamanesh Iran/Australia 1949-
きみはただここにすわっていて。
ぼくが見張っていてあげるから
You just sit here, I will keep my eyes open
1100×3100×2490mm bronze, granite
車止め bollards
ヴァラマネシュは日常の空間のなかに、思いもかけない空間をつくりあげる作家です。今回の作品はふたつの車止めという条件を守りながら、自分が使っている椅子と本をブロンズの車止めにし、自分の形を鑄造にすりこみました。彼自身の日常を日本の公共空間のなかに突然登場させたのです。それは美術だけに可能な異空間の出現なのです。

44 レベッカ・ホーン ドイツ 1944-
Rebecca Horn Germany 1944-
神庭のためのエネルギー・バロメーター
Energy Barometer for a Zen Garden
stainless steel, glass
植栽内オブジェ object in shrubbery
ホーンは若い頃からいろいろなパフォーマンスを行って来ました。簡単な機械を使った作品をつくることも多く、それらの変わった動きは文明に対しての鋭い批判となっています。立川では2本の松を植えました。松と金属棒とじょうごが連動し、大地と水と植物を自然のエネルギーが循環するという作品です。それは新しい土地を再生する力のシンボルになっているのです。

45 マリーナ・アブラモヴィッチ 旧ユーゴスラビア/オランダ 1948-
Marina Abramović former Yugoslavia/The Netherlands 1948-
黒い竜一家族用
Black Dragon for family use
105×190×110mm (15 pieces total) crystal
機械出入口 equipment loading entrance
アブラモヴィッチは長い間いろいろなパフォーマンスをしてきました。現代の美術は人間の身体や動作も含めたすべにより、新しい知覚を呼び起こそうとします。彼女は以前、一緒に仕事をしていた男性と中国の万里の長城の間隔から歩いてきて出会い、そのまま現実に永遠に別れるパフォーマンスをしました。立川ではブラジル産の水晶に銅、鉄、性器をあてて理想する壁をつくりました。

46 ゲオルギー・チャスカノフ ブルガリア 1934-
Georgi Tchapkanov Bulgaria 1934-
1350×1100×600mm steel
遊道神(立川の動物たち-羊-) guardian deity figure (animal in Tachikawa-sheep)
No.27を参照してください。

47 彦坂尚富 日本 1946-
Naoyoshi Hikosaka Japan 1946-
赤い作品「母と子を殺した父親のようなもの」、
青い作品「父親に殺された子を愛させた父親のようなもの」
Red work "Like a Father Who Has Killed His Wife and Child",
Blue work "Like a Father Who Fertilized the Child He Had Killed"
(a)2000×1400×310mm, (b)2000×1500×310mm steel
植栽内オブジェ object in shrubbery
彦坂尚富は美術学生の時から美術と、それを囲む社会について深く考えてきた人です。この植栽口では全体をつくらうとしたが、制限が多く、その制限のなかで排気口の高さについてこだわるとしたそうです。その結果できた馬の鞍のような形は道路側からも建物側からも見て面白いものになりました。

48 牛渡/ニューボ 中国 1960-
Niu Bo China 1960-
標的の裏側
The Reverse Side of a Target
(a)1630×4545mm, (b)2400×2710mm aluminum
換気塔 ventilation tower
彼はこの時代、芸術表現はやり尽くされてしまったと考えます。ゼロからの出発のために、宇宙時代のアートとして、大空に飛行機の排気によって描かれる大空絵画や、無重力空間のなかで美術運動を行なう無重力絵画を始めました。ここでは20世紀美術の代表的なふたつの作品、ジャスパー・ジョーンズとルー・ウォォルターのパロディによって自分の立場を表明しているのです。

49 ウスマン・ソウ セネガル 1935-
Ousmane Sow Senegal 1935-
倒れた人
The Fallen
(a)1180mm, (b)1050mm iron, mixed media
植栽内オブジェ object in shrubbery (strangers)
最初ソウに会った時、彼が見ていた本に、アフリカの人達を描いたスケッチが載っていて、それを見る時の彼の顔は実に嬉しそう、これは〇〇族だ、これは△△族だといっているように見えます。今回の材料はいわば日本の古い乾漆像のようなものですが、ソウに言わせると屋外でも大丈夫な彼の工夫によるものです。

50 ジョセフ・コスース アメリカ 1945-
Joseph Kosuth USA 1945-
祝文、ノエマのために(テキスト:石巻道子「椿の海の記」、
ジェームズ・ジョイス「若い芸術家の肖像」)
Words of a Spell, for Nôema (Text from Michiko Ishimure:
Story of the Sea Camellias and James Joyce:
A Portrait of the Artist as a Young Man)
430×41700×70mm neon tubes, slate, steel
車路堂 parking ramp wall
今までの芸術は視覚芸術でしかなくという反省から、芸術の存在理由を問うという考え自体を芸術にする傾向が現れました。コスースは視覚的な東洋のなかにあつた美術に、新しい広がりをもたらしました。石に彫られたふたつのテキストの交差する対比は、見る者がどう考えるかで複雑な意味をもちあはれるのです。

51 依田久仁夫 日本 1949-
Kunio Yoda Japan 1949-
690×2700×600mm ceramic
車止め(ベンチ) bollard (bench)
依田久仁夫はできる限り少ない土を使って作品をつくらうとしています。ですから普段の作品は光を通すほど薄いものです。彼にとって土という材料は紙や木に近いやわらかなものになっています。今回のように真中の人が乗るベンチという場所は彼のいつもの仕事とはあまりにも違いますが、ギリギリのかたちで彼の考えを活かして美しいベンチをつくりました。

52 フェリーチェ・ヴァリーニ スイス/フランス 1952-
Felice Varini Switzerland/France 1952-
背中あわせの円
Circles Back to Back
acrylic paint
ペDESTリアンデッキサイン pedestrian deck sign
No.39を参照してください。

53 依田久仁夫+エステル・アルバルダネ 日本/スペイン
Kunio Yoda+Esther Albardané Japan/Spain
690×4050×600mm (bench) (ceramic, steel
車止め(ベンチ), 遊道神(見知らぬ人) bollard (benchi), guardian deity figure (stranger)
エステル・アルバルダネ:No.9を参照してください。
依田久仁夫:No.51を参照してください。

54 白井美穂 日本 1962-
Mio Shirai Japan 1962-
1228×1626×80mm stainless steel, processed graphic film sheet
ペDESTリアンデッキサイン billboard on the pedestrian deck
No.14を参照してください。

55 山本正道 日本 1941-
Masamichi Yamamoto Japan 1941-
1180×2450×400mm bronze, granite
車止め(ベンチ) bollard (bench)
山本正道は石とブロンズを丁寧に組み合わせ仕事をしますが、同時に風景そのものが彫刻になるような仕事もしています。彼の作品からは、時代を超えてこだわり続ける人間への関心が彫刻の本質に迫るものだという考えが伝わってきます。夢を追い、ふくらませ自分の心のなかの世界をあらわすという彫刻家の考え方がわかる作品です。

56 深井隆 日本 1951-
Takashi Fukai Japan 1951-
1200×350×450mm (2 pieces total) black granite
車止め(ベンチ) bollards (benches)
深井隆は木彫りの作家です。そこには玉座のはばきがあつて、木を神々しいものにしてしまいます。彼は日本古来からの木彫りの魅力を現代に新しい感覚で呼び起こそうとしているかのようです。今回は車止めという設定でした。彼はこう言います。「美しい空間や環境は人をよりやさしくします。できれば私の作品もその空間に調和や安らぎを奏でるひとつでありたい。」

57 片瀬和夫 日本 1947-
Kazuo Katase Japan 1947-
星座又は星の宿
Constellation, or Star Shelter
(a)1200×mm, (b)500×3600×3600mm basalt, ceramic
植栽内オブジェ object in shrubbery
片瀬和夫はできる限り省略化した形といわば禅のような思想をともに作品にとりこむことで、見る側の精神の広がりをつくらうとしているようです。ここでは立川産の玄武岩の球体と日本産瓦の対比です。球にはひとつの星が、瓦には比喩的意味にある27個の星が刻まれています。ここには世界共通の神話に対する郷愁があるようです。

58 箕原真 日本 1959-
Shin Minohara Japan 1959-
人の球による空間ゲート
Spatial Gate Made of Human Spheres
(a)1200×852×810mm, (b)1020×852×810mm (d)840×852×810mm aluminum
車止め bollards
箕原真は建築家です。ここは歩行者専用でありながら、時には緊急車両が入りうる移動可能な車止めを2か所につくりました。球体の放散を立体と置でつくりながら、その球体を感じさせる装置です。それを作家は球空間による「空間のモデル」と呼んでいます。車中心の都市の環境を人間中心のものへと変えていく契機があるような車止めが登場したので。

59 エステル・アルバルダネ スペイン 1947-2004
Esther Albardané Spain 1947-2004
タチカワの女たち
Tachikawa Women
2250×930×640mm (2 pieces total) steel
遊道神(見知らぬ人) guardian deity figure (stranger)
No.9を参照してください。

60 イーエフペー フランス 1984結成-1995解散
IFP France 1984-1995
4950×900×350mm (4 pieces total) stainless steel, acrylic sheet, lighting equipment
街灯 street lamp
IFPは、グループの名前です。アートは作家に属するものではないという考えによって、はじめは従来のアートの考え方を更新しようとする。たとえばシンボリズムまでをアートとするようなことでデビューしました。ここ立川では、夜の闇にあつて青空に浮かんでいるというような視覚的な美しさを重視し、環境や建築空間などの調和を追求した照明作品をつくりました。

61 アレシュ・ヴェゼリー チェコ共和国 1935-
Aleš Veselý Czech Republic 1935-
ダブルベンチ
Double Bench
2200×2400×700mm iron, granite, stainless steel
ベンチ bench
ヴェゼリーは石や鉄など力強いものの衝突によって、より以上の力強さを示す作品をつくりだして来ました。それはしばしば物理学の原理のような緊張した美しさをあらわします。彼はこの仕事のために100個もディテールを考えたそうです。デュッセルは決定的な形をつかむまで繰り返されます。それらを見る作家と作品の内面と構造が、形とともにわかってくるのです。

62 アニッシュ・カプーア インド/イギリス 1954-
Anish Kapoor India/UK 1954-
山
Mountain
2500×4500×2300mm iron
植栽内オブジェ object in shrubbery
空間は形ある物質によってつくられるだけでなく、その形からつくりだす形以外の無空間によって構成されます。カプーアは立体による新しい空間をつくりだして来た作家です。欧米型の物質の量感をもとにしたり、空間の均質化にもとづいた構築的な空間ではなく、いわばアジア的な自然と精神の広がりをもたらしながらも、素材そのものの形や性質を大切に空間をつくりだします。

63 藤本由紀夫 日本 1950-
Yukio Fujimoto Japan 1950-
耳の椅子
Ears with Chair
1150×2500×500mm stainless steel
ベンチ bench
藤本由紀夫は音の装置をつくる作家です。ここでは直径6cmのパイプを両耳にあてて、目に見えない空気の変換のための装置です。目に見えないものだけではなく、それ以上に目に見えないものでできています。騒々しい時でも、静かな時でもそれらの環境がつくる音はパイプを通して耳に達します。その時パイプの共振によって独特の鳴りをもった音になるのです。

64 ウルリッヒ・リュッククリム ドイツ 1938-
Ulrich Rückriem Germany 1938-
1500×2500×500mm granite
植栽内オブジェ object in shrubbery
リュッククリムは切断する以前の石のもつ形態と性質をそのまま活かしながら、石がもつあまり知られていないいやわらかさや透明感を美しい形として示す作家です。彼は切断した石を砕きつないでください。自重によって石は安定するのです。今回は安全上、鉄で上下の石をつなぎましたが、彼は不満でした。石と対峙する作家は石のことを法律家よりもよく知っているのです。

65 川俣正 日本 1953-
Tadashi Kawamata Japan 1953-
3305×5525×1215mm galvanized steel, steel
倉庫 storage
川俣正は古い建物を素材で囲む、水辺に小屋をつくるなど、幻覚的ともいえる空間を風景のなかにつくって来た作家です。物質を街中に置いたりもします。彼は街を歩き、街や建物に隠された記憶や意味を、木の断片や小屋の設置によって新しく見せようとするのです。昔というキャンパスに描かれた美しい線が、都市と時間がもつ濃くかつかしい関係を知らせてくれるのです。

66 ジョナサン・ボロフスキー アメリカ 1942- Jonathan Borofsky USA 1942-

フリーケースをもった男 Man with Briefcase 8120x2340x64mm steel 道徳的(見知らぬ人) guardian deity figure (stranger) ボロフスキーはずっと自分自身の姿をつくって来ました。この鉄の彫像も自分が描いたデザインをつめたフリーケースを持っている作家自身です。足もとに数字は作家自身が選んでいた時間の経過をあらわしています。この社会のなかの自分をあらわす日常のなかでカウントすることが人間の孤独な存在を表現しているようです。この像は地域で働く人の姿にも見え、共感を呼びます。

67 青木野枝 日本 1959- Noe Aoki Japan 1959-

4520x3700x3700mm steel, urethane paint 換気扇 ventilation tower 鉄は本来硬く構築的な素材ですが、青木野枝はやわらかく不安定なあやうさをもった鉄の個性を見せようとしてきました。それは現代社会の感覚につながります。例えば不安という感情は鉄にはないし、不安という感情は目には見えませんが、確かな感覚として感じられます。この見えぬ感覚がつけられた形や色から伝わってくることに美術の秘密と奥行きがあるのです。この感覚の共有が作家を現代の精神の記録者とするのです。

68 宮島達男 日本 1957- Tatsuo Miyajima Japan 1957-

Luna (3900x3590mm)x2 sides, (3600x1770mm)x2 sides LED, plastic 換気扇 ventilation tower 宮島達男は無限に点滅する数字を使う作家で、それは美術が時間と深く結びついていることを教えてくれます。「私の時計は、ばらばらの時間、144個から構成される。それはデジタルな数字で1〜9までカウントし、また1に戻って繰り返す。そして"0"は表記されない。カウントするリズムは1/10秒の速いものもあれば、10時間にひとつしか進まない非常に遅いリズムのものもある。」

69 マーティン・キッペンベルガー ドイツ 1953-1997 Martin Kippenberger Germany 1953-1997

2350x1800x500mm aluminum, glass, lighting equipment 街灯 streetlamp 彼は美術がどういふものであるべきかと、どんな役割をもつべきかという規範とはまったく別のところで作品をつくろうとしています。彼にとってスタイルとは作家の個性のありかであり、行動と決意によって達成されるものなのです。むしろ彼は人にこう言ってもらいたい。「キッペンベルガーはいい親戚だったよ」と。これは悪い文明のなかで息子を亡くした彼自身にサンタクローズが怒っている作品です。

70 ジョーン・ピエール・レイノー フランス 1939- Jean-Pierre Raynaud France 1939-

5900x6470x6mm (cobalt) aluminum, steel stone オープン・カフェテラス open café レイノーは単純化した物体や環境をつくります。彼は以前、四角の白いタイルだけでできた家をつくって、そこに25年住みました。その家は全体が作品であって、その白さを伝えるために家で火を使った調理はせず、食事はいつも外食でした。アパートのオープン・カフェテラス全体を赤い木目と自然石でつくった絵物の庭もそういふ考えの延長にあります。

71 ロバート・ラウシェンバーグ アメリカ 1925- Robert Rauschenberg USA 1925-

自転車もどき VI Bicycloid VI 1560x1830x710mm bicycle, neon tubes, glass, H-shape steel 絵輪のネオンサイン neon sign for a bicycle parking lot ラウシェンバーグは反アバルトヘイトやエイズをなくすための運動に深くかかわり、作品においても社会的な問題を扱ってきました。その材料には、絵の具などと一緒に新聞紙のような日常の道具が使われ、彼の作品においては社会と美術が同じ線にあるかのように。今回は普段使っている自転車にネオンをつけて面白くしたものを、絵輪のサインとして使ったのです。

72 ニキ・ド・サンファル フランス 1930-2002 Niki de Saint Phalle France 1930-2002

会話 The Conversation 1040x1620x1240mm fiberglass reinforced plastic ベンチ bench ニキは原色を使ったやわらかな形で生命の力をつたいあげた作家です。そこでは女性や花や蛇や首が、赤、白、青、紫、緑、黄などの色とともに、実に楽しく子どものように、はじけるような充実した動きをします。そういえば昔の日本の仏像が、女性のふくよかさを基本にしつつ、指や口などのディテールは子どもをモデルにしていることを思い出します。

73 サンデー・ジャック・アクパン ナイジェリア 1940頃 Sunday Jack Akpan Nigeria ca.1940-

2000x1000x800mm (7 pieces total), 1600x700x800mm (7 pieces) 100% concrete オブジェ(見知らぬ人) objects (strangers) アクパンの作品は、村人それぞれがいちばん素晴らしい姿の肖像を注文したところにやっています。普通は正装の姿を、サッカー選手ならボールを蹴った瞬間を頼みます。それはやがて注文主が死んだ時にお墓に建てられます。そのつくり方がまた面白い。砂で型をつくりコンクリートを流し込み壁と背中を張り合わせその後に彫刻するのです。立川ではナイジェリアの酋長が勢いいます。

74 山口啓介 日本 1962- Keisuke Yamaguchi Japan 1962-

Tachikawa Box 2590x1780x600mm steel, glass, acrylic sheet, lighting equipment ペDESTリアンデッキ柱脚サイン sign on the wall of pedestrian deck post 山口啓介は銅版画の作家ですが、今回は案内板をつくりました。この案内板は3度になって1層目はファール立川の現在、2層目は開発前(1989)の街、そして最後の地下層には昔生えていた植物のプレラートがその街の記憶を伝えます。照明も入っていて楽しいものになっています。

75 植松聖二 日本 1949- Keiji Uematsu Japan 1949-

浮かちかちー赤／垂 Floating Form-Red/Vertical 2300x2900x400mm stone, steel, stainless steel オブジェ object 植松聖二は異質な材料の形態とボリューム、色、線を使って空間の安定と崩壊の境目に成立する緊張した作品をつくりだす作家です。ここでは丸い自然石と真っ赤な円錐状の鉄棒と鉄板という4つの要素が力学的にも色彩的にも劇的なコントラストと関係している作品をつくりました。重力や引力、エネルギーといったものは地球という場への興味から来ているような気がします。

76 眞原真 日本 1959- Shin Minohara Japan 1959-

人の球による空間ゲート Spatial Gate Made of Human Spheres (a)/(c)1000x1002x780mm, (b)/(d)1250x1002x930mm aluminum 車止め bollards No.58を参照してください。

77 市橋太郎 日本 1940- Taro Ichihashi Japan 1940-

94-82" 3973x1531x658mm aluminum ペDESTリアンデッキ支柱 pedestrian deck post 市橋太郎は変形したキャンバスに描く作家です。ここではペDESTリアンデッキの連続した円柱のひとつが構造的な理由で不定形になったものを作品にすることになりました。完全さを予測できるものでありながら完全ではありえなかった形の不安があるわけです。しかしその不完全な柱はそれ故にこぼれとつた美術的表現になる自由と発見をもたらしたいのです。

78 ゲオルギー・チャスカノフ ブルガリア 1934- Georgi Tchapanov Bulgaria 1934-

530x1370x580mm steel 道徳的(立川の動物たち) guardian deity figure (animal in Tachikawa-dog) No.27を参照してください。

79 スティーヴン・アントナコス ギリシャ/アメリカ 1926- Stephen Antonakos Greece/USA 1926-

Thio-2 180mmx180mmx70mm stainless steel, neon tubes 壁面照明サイン illuminated sign No.11を参照してください。

80 ジョゼ・デ・ギマランイス ポルトガル 1939- José de Guimarães Portugal 1939-

偶像 Idol 1400x1020x615mm ceramic, mortar, steel オブジェ(見知らぬ人) object (stranger) ギマランイスは赤、黄、緑、青などのはっきりした原色を使った楽しい人間の姿をよく描きます。立川では、スタイルを寄せ集めた作品をつくりました。こういうモザイクはバルセロナ生まれのミロやガウディの仕事の思い出させます。ポルトガルもバルセロナも空と大地の強い色の影響を受けているからかもしれません。

81 岡本敦生 日本 1952- Atsuo Okamoto Japan 1952-

黄色の種類 Kinds of Yellow 1150x2500x840mm stone, brass 車止め bollard 岡本敦生の石の作品は割れたり、切り取られながら大地とかわわっているところに特色があります。石がもともと大地から切りだされてくる。その初期の姿を想像させるのです。自然のなかから出てくる形です。今回は本来置かれるふたつの車止めの範囲に石とブロンズで鉄のような形をつくりました。あたかも古墳から出てきた石と真鍮のような感じ。

82 河川龍夫 日本 1940- Tatsu Kawaguchi Japan 1940-

関係-未来-2132年、関係-未来-2116年、関係-未来-2089年 Relation-Future 2132, Relation-Future 2116, Relation-Future 2089 810x6mm, 750x6mm, 520x6mm metal 木のつた実 hatters tied to trees 河川龍夫は時間や物質の関係を見せようとする作家です。ここでは街に植えられた3本の木の柱にそれぞれ直径の違う3つの銅の輪をはめました。この輪はそれぞれ2089年、2116年、2132年に予定される木の幹の太さなのです。私たちがそれを見て都市のなかに移植された木の生命と未来の思いを、人間自身を考えるとどういふ仕掛けになっているのです。

83 タデウス・ミスロウスキー ポーランド 1943- Tadeusz Myslowski Poland 1943-

800x250x250mm (4 pieces total) steel 車止め bollards ミスロウスキーはニューヨークにやってきました。そのプラン(街の平面図)を操作した後にそこに美しい方形のユニットを見つけた。地盤は世界や宇宙にまでつながるファンタジーであり、空想的なものです。それが彼のつくった最小単位の形になりました。今回は上部が異なる4つの車止めを鉄でつくりました。世界を極端にまでつなげた形をつくるのが彼のねらいです。

84 江上計太 日本 1951- Keita Egami Japan 1951-

2000x6mm stainless steel 換気扇 ventilation tower No.33を参照してください。

85 西澤敏 日本 1946- Masaaki Nishi Japan 1946-

廻る大木 A Huge Tree in Ascent 650x2630x650mm bronze 車止め(bench) bollard (bench) ここにあるのは大木の、使われられられたいという姿です。それはブロンズでできていて、この街では車止めとして機能し、ある時はベンチにもなる。西澤敏は金属の腐蝕によって時間というものを考えさせる作品をつくり、時間の遅いのが物質にもたらす差異が美しさをつくることもあり、また見る人の心の状態によって作品は変わります。作品にも人生があるのです。

86 フランシスコ・インファンテ ロシア 1943- Francisco Infante Russia 1943-

940x5000mm (ceramic tile), 740x5000mm (mirror) ceramic, stainless steel 機械搬入口 equipment loading entrance 彼は現代の機械文明と芸術を結びつけようとしています。普通は写真を使いながら、自然という画面を操作することによって思いもしない人工と自然の調和の瞬間をつくりだすのです。彼は日ごと体罰のなかでも新しい仕事をし続け、今もその疑問を繰り返している作家です。立川では、東(絵を描いた板)を(鏡面ステンレス)に反射させることでいつもの考えを都市のなかに実現しました。

87 沈文鏗/シン・ムン・サップ 韓国 1942- Shim, Moon Seup Korea 1942-

開く Opening Up 1680x2540x600mm cast iron 車止め bollard シン・ムン・サップは素材の思ってもいない特質をあらわにする作家です。今までは天然の素材一木、石をよく使ってきました。今回は鉄で古代の建物の一部が白のなかにさらされたような作品をつくりました。それは彼が物質の特性に隠された記憶を表現しようとしているからなのです。彼は木や石がそれ自体も持っている沈黙の声をきくための形をつくりだしているのです。

88 フェリックス・ゴンザレス=トレス キューバ 1957-1996 Felix Gonzalez-Torres Cuba 1957-1996

3600x3640x300mm stainless steel, processed graphic film sheet, lighting equipment 非常階段看板 billboard on the emergency staircase トレスは、生活の場面で人が身近に感じている問題を意識を拡大して公共の場にもちこみ、それによって人びとに目覚めさせていることを思い起こさせたいとする作品をつくりました。「愛」や「希望」という一見あたりまえでありながら忘れがちな問題を扱った作品です。立川では、永遠の時の流れを、空と鳥の拡大した写真(看板)を通して伝えているのです。

89 ジャウマ・スレンサ スペイン 1955- Jaume Plensa Spain 1955-

1440x400x450mm cast iron 車止め bollard プレンサは鉄そのものの形の上に、鉄による字を彫りつける作品をつくり、それは詩人のように鉄に話してうたいます。「ファール立川が美しいのは、才能あるアーティストそれぞれが、都市の生きた一部となっていることです。ひとつひとつの作品は、それぞれ異なる風物の上に広がる精神の小さな点であり、観客に対し自らを隠さず開いていく小さな質問者なのです。そこには記念碑も詩人もありません」

90 マーティン・スーリエ アメリカ 1941- Martin Puryear USA 1941-

1670x4270x1830mm stainless steel, granite ベンチ bench プーリエは木や竹といった自然の素材を使って美しい形をつくる作家です。その形は私たちが失ってしまったしなやかな曲線と、軽やかなリズムをもっています。遠く太い根と消えているような線がその特色となっています。プーリエのねらいは彫刻のうしろに浮かぶステンレスでできた「透明な鳥」をつくることにあるのです。

91 チャールズ・ウォーゼン アメリカ 1958- Charles Worthen USA 1958-

水廻り Water Quiver 730x465x270mm bronze 散水栓カバー water faucet cover No.3を参照してください。

92 ゴンザロ・フォンセカ ウルグアイ 1922-1997 Gonzalo Fonseca Uruguay 1922-1997

ベマ Bema 1750x450x6mm stone 車止め bollard この作品は作家自身による、石でできた照明灯のようなものです。そこにあつて周囲を照らす光。フォンセカにとって、光とは古代から時を経て前向きな内なる生命の灯のようなものです。だからフォンセカの石の作品は暖かみを感じます。この仕事を頼んだ頃、彼の息子が亡くなりました。彼は半年くらい仕事ができなかった。そんなことがこの作品の背景にあります。

93 ヘンリー・ムンヤラジ ジンバブエ 1933-1998 Henry Munyaradzi Zimbabwe 1933-1998

1830x390x320mm stone 車止め bollard ムンヤラジの作品はジンバブエのシナ族に深く根付いた社会観からきています。シナ彫刻は彼が創設した流派で、自律的な芸術運動として1950年代後半に発展しました。精神的な物質のなかに現れる、遠く石に彫られた線は、石の力を強さと、というものです。石に彫られた一本の線は、石そのものの力強さと、そこに宿る精神のありかを見せてくれます。

94 竹田康宏 日本 1959- Yasuhiro Takeda Japan 1959-

800x400x400mm stone, bronze 車止め bollard 竹田康宏は主として木材を使った作家です。ここからは氷河時代の記憶がよみがえってくるような時すらあるのです。作家は時代や民族性や思想をこえた人の感性に訴えかける仕事をしたいと考えています。その例として彼は「花を愛する行為」をあげ、この立川ではつぼみ素材として、花、葉、実を造りたいのちの表現をしようと思ったのです。

95 トマーソ・カッセルラ イタリア 1951- Tommaso Cascella Italy 1951-

1200x500x500mm bronze 車止め bollard カッセルラは細い金属を使って、深々とした空間をつくり、二次元としての線と面が三次元の空間をつくり、線の場合、その線の部分をできる限りなくして立体的な空間をつくるのです。物質によってつくられる形は、形だけでなく、形以外の見え方、空間に響き及ぼすこと、立体的な空間において、形以外の線がかりをもち得るかどうかが重要になるのです。

96 瀧村光 日本 1948- Hikaru Yumura Japan 1948-

黒い柱 Black Pillar 1000x250x330mm granite 車止め bollard 瀧村光は石を使ってシンプルな形をつくる作家です。今回は重くなった石がスズで溶けながらお互いに組み合わさった姿になっていますが、ここでは切、削、組み立てるといふ彫刻の基本作業がはつきりわかるものになっています。作家のつくった形は自然のなかにあるものの発見から生まれることが多いのです。

97 瀬田友子 日本 1947- Tomoko Ushioda Japan 1947-

1280x500x250mm aluminum, stainless steel 車止め bollard 5cmの金属製の立体ブロックで積み上げられたふたつの形は入子のような積み木木工です。ふたつの角の角の上に相似形の小さな角柱が乗っている作品は、それがまたファール立川の全体でもあり一部でもあることを想起させます。それはさらにファール立川が世界を映す鏡でありたいという考え方に繋がってくるのです。どんな一隅の鏡にも世界は映っているのです。

98 氏家慶二 日本 1951- Keiji Ujie Japan 1951-

1410x250x250mm granite 車止め bollard 氏家慶二は石を使って楽しい彫刻をつくる作家ですが、広場や公園全体の計画もしています。石の作家は世界各地で採れる石の種類と性質をよく知っていて、仕事で各地から石をとりよせたり、時には採石場まで行って採る石を指示したりします。作家は埋まっている石のなかにすでに掘り起こすべき石の姿を見ているようです。

99 ロベルト・G・ヴィラヌエヴァ フィリピン 1947-1995
Roberto G. Villanueva The Philippines 1947-1995



都市の神
Urban Deity
1200×400×500mm bronze
道祖神(車止め) guardian deity figure (bollard)
毎年10月13日開帳 Open to the public on October 13 every year
ヴィラヌエヴァは都市の近代化によって失われた固有の文化をつかみ直すために地方に移り住み、そこで他者も参加する表現活動を行ってきました。彼の作品には古代からの習慣や儀式が入ってくるのです。立川では同性具有の都市の神をつくりましたが何度も壊されました。この神である作品は毎年10月13日にご開帳される以外は閉ざりにまわることになりました。

100 階里寿郎 日本 1960-
Juro Kagesato Japan 1960-



1120×400×400mm stainless steel, granite
車止め bollard
階里寿郎は人型の部分で固まっている作品をつくりました。彼は日常の感覚で接しながらユーモアのある彫刻をつくります。この彫像は道ゆく人が立ち止まり自分を見る鏡なのです。都市はさまざまな人たちが生きている場です。彫刻作品は見られるだけでなく、その人たちを見ているのです。日々急いで生きている人たちに、自分を再発見させる装置なのです。

101 松田重仁 日本 1959-
Shigehito Matsuda Japan 1959-



1330×280×280mm bronze
車止め bollard
松田重仁は木彫りの作家です。今回の仕事でも、まず木彫ってそれを型抜きしブロンズの作品に仕上げました。ですから木彫りのノミのあとがそのまま感じられます。ここでは作家はひとつの突をつくりました。そこにはタイムカプセルとして未来に花咲く実をつくらうとの望みがあるのです。身近なものに対する愛着は美術の動機のひとつなのです。

102 植村公雄 日本 1949-
Kimio Uemura Japan 1949-



1200×409×500mm stainless steel
車止め bollard
植村公雄はステンレスという輝きのある材料に色と形を組み合わせることで異質な色調のある作品をつくります。これは要素を減らすという最近の美術には珍しく、足し算の世界です。その足し算は、雲や山や川といった幼い頃の記憶によってできています。幼い頃の記憶を要素とする態度は美術の動機のひとつです。

103 リカ・ムータル オランダ 1939-
Lika Mutal The Netherlands 1939-



1180×340×180mm granite
車止め bollard
ムータルはこの御影石の彫刻で、外観は分裂していても、万物のなかにある統一という基本的原理を示そうとしました。ここでは上部は圓の輪でつながっていて、その下はふたつの割られた石によってできています。その方法は、輪をつくらせ、石の下部を割るという難しい作業によるものでした。作家はこの編道に、家庭や美術館のようなとどまるための場所を設定したかったのです。

104 小林泰彦 日本 1947-
Yasuhiko Kobayashi Japan 1947-



1150×900×200mm stainless steel
車止め bollard
小林泰彦は目が錯覚するような作品をつくりました。車路側がまっただけで歩道側が少し変わった道法でできている。地上との接点が1点という不安定な形です。作家はなにか楽しい遊びをしてやろうと考えているようです。ステンレスの作品の場合ブロンズのように手でつかんでつくっていくわけではなく、頭の中と空間の上での作業が多くなるかもしれません。

105 藤原吉志子 日本 1942-
Yoshiko Fujiwara Japan 1942-



ウサギとカメ
A Rabbit and a Turtle
950×500×500mm bronze
車止め bollard
藤原吉志子は金属を型にかしこんでつくる作家です。それを鋳造(ちゅうぞう)というのです。よく知られた動物や童話を、楽しい意匠をつくりだす童話作家といえるでしょう。彼女にとって、子どもがよじ登り、大人が腰掛けておしゃべりして、てっぺんがびかびかする、そんなほのぼのとした感じになる彫刻がのどかな景観ものとして天下の公道にあることが望ましいのです。

106 金沢健一 日本 1956-
Kenichi Kanazawa Japan 1956-



1200×300×300mm stainless steel
車止め bollard
金沢健一は鉄やステンレスの立方体の組み合わせによって、シンプルな作品をつくります。単純な方法で感動を与えることを目指す作家は多いのです。ステンレスは鉄とニッケルの合金ですが、この素材の登場は現代の空間を特徴づける輝きと軽さ、強さをもっています。現代の都市空間ではよく使われますが、それ故にそのシンプルな造形で独自の作品をつくるのに苦労するのです。

107 黒島晴男 日本 1950-
Haruo Kurotori Japan 1950-



1200×440×440mm fiberglass reinforced plastic
車止め bollard
黒島晴男はグラスファイバーを使ってシンプルな垂直の形をつくりますが、この単純な形をどれだけ美しいものとするかに作家の丹精と思想が関わっているようです。作家は単にどこに置いてもよい立体をつくるのではなく、あくまで現実的な広がりをもつ空間がそこにあるという意識のなかでつくります。都市機能そのものとしての美術に作家は関心があるのです。

108 レベッカ・ベルモア カナダ 1960-
Rebecca Belmore Canada 1960-



300×180×6mm stainless steel
車止め bollard
ベルモアは、カナダ先住民アニシナベの作家です。彼女の仕事にはカナダの自然とその素材を使って大地に話しかけたり、失われた民族の言葉を求めたりするものが多く、時間と土地の深い結びつきを人に知らせるのです。ここでは車止めの建物の2カ所にアニシナベ語と日本語で「私は太陽を待つ」と書かれたプレートがおかれ、それらが太陽の光を反射して重なりあいます。彼女はここで異なった世界のつながりを示そうとしたのです。

109 ヴイト・アコンチ アメリカ 1940-
Vito Acconci USA 1940-



1500×3000×600mm fiberglass reinforced plastic
車止め(ベンチ) bollard(bench)
アコンチは空間の意味をがらりと変えてしまう仕事をやる作家ですが、昔はパフォーマンスをすることによって美術というものの見方や常識を変えてきました。やがてパフォーマンスの場の装置に関心が移り、ついに空間自体の変容へと向かったのです。今回は、舗道そのものが車になるという作品をつくりました。それは車社会に対する疑問にもなっているのです。